

自己評価及び外部評価票

「自己評価の実施状況(太枠囲み部分)」に記入をお願いします。(セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)- です。)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	毎回の職員会議で、グループホームの役割を再度確認し合っている。	“グループホームすみかの願い”を基本として具体的なケアの本質が示されている。基本は変わらないが支援方法については見直しも視野に入れて取り組んでいる。2ヶ月に1度グループホームのあり方について職員で確認あっている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	地域行事への参加、地域支援(清掃・雪かき)(経済困難者への支援)(近隣住人への声かけ)を実施している。	地域と共に歩むことがホームとしての理念であり、地域が高齢化する中で職員自ら地域機能の維持に取り組んでいる。(清掃・雪かきなど)なかに生活困窮者もおり行政と連携して支援している。情報発信をして地域の困り事にも手を差し伸べている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	福祉広場での講演や相談業務。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	2ヶ月に1度の会議にて、運営状況・人事・活動内容を報告して、助言を求めている。	2ヶ月に1回は開催している会議資料がある。まどめの資料としての整理はされていない。職員への伝達は口頭で行っている。運営推進会議のあり方についてマンネリ化しており打開策に悩んでいる。会議の内容が薄くなりがちである。	案として出されていた家族会の延長で開催するとか、行政に相談して会議の持ち方について指導いただきながら、意義のある運営委員会にしていられる事を期待します。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力を築くよう取り組んでいる。	包括支援センターとの連携強化を行っている。	合併により以前のような細かい連携が難しくなっているが、包括支援センターとは事務的な質問、生活困窮者対応など話し合っている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	禁止の具体的な事項は100パーセント理解できていない。	マニュアルがあり、年に一回は読み合わせをしているので基本的には職員は理解している。日頃拘束と感じられる事項については都度議論してその必要の有無を検討しながらサービス提供に努めている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	夜勤帯にて1人夜勤であるため、ストレスにならないよう職員のSOSには注意を払っている。		

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	十分には対応できていない。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	変更時は同意書等で確認をしている。また、月に最低1回は家族と面会するようにしている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	家族会や最低月1回の家族との面会時に不安を聞くようにしている。	日用品利用の請求を月1回行い利用料を持参いただいたときに面談をして意見を聞くというのが原則である。	家族だけの話し合いの場とかを、行事の機会に設けるなどして気兼ねなく話せる機会を設置することも考えてみてください。
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	個別面談を活用している。	個人目標をそれぞれに作ってもらって、管理者の個人面接で進捗状況、悩み、問題などを聞いている。又勤務時間帯が一緒になったときなど管理者やリーダーが個人的に話を聞くこともあり、随時意見の聴取に努めている。	個人目標の管理は大切なことですので、職員教育の一環としても面談を重視して記録に残す努力を今後も続けていかれることを希望します。
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	勤務状況・労働時間はできるだけ配慮できていると思われるが、給与水準は中々引き上げられない。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	個々に実施している。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	宅老所・グループホーム連絡会の圏域役員に選出され、そのネットワークを活用している。		

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	紐解きシート・センター方式の活用		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入所契約の前段にて、家族の意向、すみかの基本理念を理解していただいている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人・家族が一番安心する支援を抽出し、関係作りの構築を図っている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	できる能力は最大限に活用していただく。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	常にすみかでの生活の様子(面談時)(すみか通信の配布)を実践している。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	個々の状況によって実施している。	家族やケアマネからの情報を収集して、本人の希望や思いに添えるよう対応している。センター方式のシートを利用して情報の収集に努めている。身体的に元気な利用者については定期的に娯楽施設や、喫茶店に行き楽しんでる者もある。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	毎朝の申し送りにて確認、実践している。		

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	退所しても、ご逝去されても関係保持に努めている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	センター方式・紐解きシートの活用	夜勤中に話を聞いて本音を引き出すこともある。利用者の思いはセンター方式シートなどで確認し、職員間で共有することに努めている。その人らしい介護支援について職員会議で話し合い検討を繰り返している様子がわかる。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	センター方式・紐解きシートの活用・面談の活用		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	各担当制を用いて個々のアセスメントを実施		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	職員会議、朝の申し送りを活用、実施。	職員会議を月2回開催して職員からの意見をもとに基本的には担当者が介護計画を作りケアマネがチェックするという方法で策定している。ただし3か月ごとのモニタリングと、介護計画の見直しが行われておらず、今後の課題となっている。	3ヶ月に1回のモニタリング、介護計画の見直し、利用者家族への説明と了解は基本として確実に実行できる体制づくりを希望します。
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	申し送りノート、特記事項、気づきシートの活用		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	できるだけ実施。		

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	近隣住民への協力。散歩にての一人歩きの報告対応。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	会田病院、篠崎医院との連携によりご家族も了解している。	全員会田病院を主治医としている。又精神科の薬を飲んでいる人が3人おり月2回は受診している。訪問看護との連携で夜間の往診も可能であり、医療と介護の連携はとれている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	他職種共同の実践を重視しており、常に看護職と連携している。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	月1回の訪問診療時における連携および適時病院への連絡にて対応している。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	終末期の方針の理解は病状の進行と共にやっている。また、事業所の対応可能な支援は十分おこなっている。	医師からの指示などについて家族に口頭で話し理解を求め終末期と看取りの対応をしている。家族との終末期対応について特に契約は交わしていない。又、家族と話し合った記録など確認できなかった。	利用者や家族の身になって丁寧な対応で看取りまでの過程を支援していることはわかりますが、終末期の支援に対しての約束事として契約しておくことを希望します。又家族との話し合い記録も整備しておきましょう
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	職員会議での勉強会および救命救急研修を法人が提供して実施している。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	定期的な避難訓練の実施。	2011年にスプリンクラーの整備はされている。消防署の点検も受けて正規に設置ができています。年2回は火災訓練をして1回は消防署に入ってもらい、指導による整備もされている。夜間訓練はやっていないが非常通報装置があり、職員が5分でかけつけることができています。	

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	その方の生きてきた過程を理解し、役割を重視する事で人格の尊重につなげている。	利用者の生活歴を重視し寄り添う介護に努めている様子が理解できる。利用者の発言について絶対否定しないことを職員に徹底して人格の尊重という理念が生きている。玄関から出て行ってしまう人については、必ず納得するまで同行している。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	外出希望、日中の活動の選択、その日の食事の嗜好を聞きながら、生活に反映している。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	職員配置によっては、職員ペースで組み立ててしまう事がある。外歩きの利用者さんに職員が1人着いてしまう為。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	衣類の選択ができる方は、入浴準備の段階にて確認している。また、美容院に行ける方は、職員・家族同行にて対応している。化粧する方は、していただいている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	その日の生活の中に、台所作業を組み込み、役割を担っていただいている。	食事担当がほぼ専任で2人おり、他の介護者が補助にあたる。1か月単位で献立が立てられ、利用者は楽しく食事ができている。自分で食事をとることが難しい利用者については職員が十分摂取できるまで補助している。配膳食器洗いをして利用度もみられる。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事アセスメントは毎日朝の申し送りにて実施して、嗜好食材なのか、食べる能力なのかを分析する。すぐに職員連携を行う。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後の口腔ケアは必須にて、各レベルに応じて対応。		

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	排泄チェック表を活用し、基本トイレでの排泄を実施している。	昼間リハビリ使用者は2人いるが、基本おむつは使わず定期的なトイレ誘導を重視している。排泄チェック表で各自の排泄時間間隔をつかみ、日勤のリーダーの指示で、トイレでの排泄に努めている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	排便の期間、質を確認し看護師と連携にて水分、食材の選定を行い、必要であれば排便コントロールの為に服薬を行う。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている。	基本曜日を選定しているが、本人希望があった時は自由に対応している。無理やりに対応はできるだけ避けている。	週2回以上は入浴と一応は決めてあるが、入浴日でなくても入浴は可能である。入浴拒否者は2人いるが、1週間入らないときは、誘導に時間をかけて必ず入浴できるよう対応している。同性介護に努めている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	居室での就寝が不安な利用者は、ホールにてソファを利用したり簡易ベッドを利用して、安心・安全な対応をしている。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	内服は最低限の生命に関わる服薬の使用を心掛け、医療期間の協力を得ながら実践している。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	毎朝申し送りにて確認しながら、立案している。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している。	福祉広場への参加、買い物、ドライブ	本人の希望にそって買い物などに同行したり、昔なじんだ場所などにお連れしている。季節ごとに集団外出(花見、紅葉狩り)をしているが戻ってから混乱を起こす人もある。自宅へは本人の希望に沿って、家族と連絡を取りながらお連れしている。	

特定非営利活動法人峠茶屋 グループホームすみか

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	現在2名の利用者が金銭を自身で持っている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	電話要求があれば、夜間であっても対応している。ご家族に不安になっていることを理解していただき、安心できる対応をこころがける。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	雑音、音楽の音量、職員の声のトーンは特に配慮している。季節ごとの壁飾り、季節の飾りを装飾している。	昔の生活用具などが展示され季節に沿って飾りを変えて利用者の居心地に配慮されている。音に対して特に気遣いがあり、職員の声のトーンは気を使っている。テレビがないので、市民タイムスが情報源である。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	入眠前の不穏時は、特に女性利用者同士にてお茶会を実施しながら不安の減少に留意している。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	入居時に使い慣れた物品を持ち込んでいただくようお願いしている。	居室にもテレビはついておいてなく、利用者を置いてきぼりにしないケアに努めている。利用者放置にならないよう気を配っている様子がわかる。居室は家族に相談して思い思いの品の配置に努めている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	トイレ表記は日本語、昔言葉を活用し、認知症利用者の導線を重視している。入所すぐであれば、必要に応じて自立支援に繋がるよう、居室移動も実施している。		